

論文要旨

論文題目「ジョナサン・スウィフト、悪疾と諷刺」

学位申請者 小島 弘一

スウィフトの人格形成に重要な役割を演じたものは、何であったのか。

スウィフト研究において、最大の問題点は、スウィフトという人物について多くの疑問を抱えていながら、疑問解決に不可欠な、決定的資料が不足していることである。スウィフトについてあいまいなまま今日に至っているのが現状である。本論は大胆な仮説を立て、論理的にそれを立証する手法を講じて、スウィフトに関する疑問点の解決に当たってみた。その解決方法として、二つのキーワードを用いた。第一は、スウィフトの病気である梅毒であり、第二は、スウィフトが道化師がジャグリングをするように筆を巧みに使い分ける、ペルソナを使った諷刺である。

スウィフトには常に劣等感があり、そこには梅毒にかかっているという自らの状態を隠すためにペルソナが必要だった。たとえば、スウィフトの心に深く刻まれているイングランドに対する憧れは、抜きがたいものがあり、自分の出自が、アイルランド生まれであることに、大いなる劣等感を抱いていたことは、言うまでもない。彼は生活に資するだけの所得が得られれば、イングランドにさほどこだわらなかった。彼は何より自立を欲していたのである。しかし、自身が梅毒であることは、このようにイングランドに拘りを示していた彼の心の中に暗い影を落としていた。ハーレイ卿の政治的判断で、与えられたSt. Patrick's教会の主任司祭の席も、そのような感情が根底にあるため、キング大主教との折合いがうまくいかなくなり、事々に対立せざるを得なかった。アイルランドでの立身出世の出来なかったのも当然と考えられる。そして、そのようなイングランドに対する劣等感を増幅させた原因は何であるかと考察すると、彼の病気に行き当たるのである。彼のアイルランドという出自だけでなく、梅毒であるということが、以後、スウィフトは折あれば、都合のよいペルソナに身を隠して、自身の実態を他人に覗き見られないようにさせたのだ。それ故、劣等感の裏返しとして、痛烈な社会批判を繰り返し、形、手段を変えながら、発言する事で自分の満たされない欲求を顕にしていたのである。

彼の作品の中で、*Cadenus and Vanessa*及び、Stellaへの誕生日祝詩の一部に抒情詩人としての才能のきらめきは見られるが、他の作品の全てが、諷刺という手法を用いている。彼の諷刺の手法は、自分を安全圏において、スウィフト自身の憤りをペルソナという姿を借りて晴らしているのである。ドレイピア書簡の発行で、イングランド政府に抗議し、『ガリヴァー旅行記』も、序文で述べている如く、社会を驚かせることを目的として書かれたものである。これらのペルソナを用いた諷刺の手法に深く関わっているのが、彼の病気である。スウィフトは、林檎の食べ過ぎによる、消化不良が引き金となって、難聴や眩暈が発現したのではない。T. C. D. 在学中の1685～1686年頃、従来彼の経済的パトロンであった叔父Godwin Swiftが死去したので、彼に変わって次兄William Swiftが、パトロンとなり、そのため、若干経済的余裕が生じたため、他の校友たちに交じって、ダブリンの夜の巷に足を踏み入れ、当時売春婦の間で蔓延していた梅毒に罹患していたと推測できるのだ。

本論文は、これまであいまいになっていた彼の病名が、梅毒であるという大胆な仮説を立てながら、1686年以降の彼の言動について考察した。解剖学的、病理学的学説を集め、古くは、Scottや、Dr. Beddoesの論述を参考にし、Dr. William Wildeや、Dr. Meniere、Dr. Mackenzie等の耳鼻科や眼科の専門医や、新しく論述に加わった近代医学の専門医の論文から、僅かな可能性を見つけ、梅毒性内耳炎の病名が、スウィフトに相応しいものと仮定し、その点から彼の人生観と人格形成を探った。

20歳の若さで、両親弟妹をイングランドに残して、アイルランド移住を果たしたStellaには当然のように、スウィフトとの結婚があったに違いなく、Vanessaに至っては、結婚を迫ったことが、不幸な破局を招いたと言える。これらは全て、彼が自分の病気が、梅毒であることを悟った末のことなのである。彼は多くの医学書を読みふけり、友人の医師たちにも相談した。それすらペルソナの下で行って、自分には出なかったのが、親密な相談までには至らなかった。

梅毒の行く末を恐れ、狂気に至る道筋を作品に移すことで、恐怖から免れていたと推測できる。結婚願望がありながら、結婚出来ない肉体に煩悶し、やがて彼自身結婚不適合の烙印を押されてしまった。彼の女性たちがこの世を去った1730年になって、原因を作った売春婦たちに復讐する目的で、醜悪詩を上梓したと考えられる。その矛先は更にアイルランドの経済的危機をも顧みず、輸入奢侈品を身に纏って、寧ろ日ないアイルランドの婦人たちにも批判の目を向けたのであり、社会的悪に対する諷刺があれほど狂気に満ちていたのは、梅毒によって狂気に至るであろう自身をペルソナによって同定し、全て世に受け入れられなくなった恨みの発露であったと考えられる。このように、スウィフトの病因が梅毒であったならと仮定すれば、スウィフトの人格形成と狂気に至る諷刺の手法を説明することができるのである。